

CITY & LIFE

都市のしくみと暮らし

1989・冬号

Vol. 12



特集

都市とアメニティ

一九世紀の英国。産業革命期の劣悪な環境が、
この国の都市計画にアメニティという概念をもたらした。
そして今、この概念は高度経済成長期を経て、
環境に付加価値を求める
われわれ日本人にとつてもなしみの深いものとなった。
しかし英国におけるアメニティと日本のそれは
決して同質ではないだろう。
そこで日本の中でアメニティがどのように理解され、具現化されてきたのか、
またどんな課題をかかえているのかを、
様々な角度から探つて、こうと思う。

C I T Y & L I F E

C O N T E N T S

特集◎都市とアメニティ

- ② アメニティとはなにか／日笠端
- ④ 誰のための道路か／岡並木
- ⑥ 多様な水との出会いに向けて／陣内秀信
- ⑧ 生物のいる風景のデザイン／小林治人
- ⑩ 第六感の住宅建築／宮脇檀
- ⑫ 旅の宿とcomfortable／徳田敦司
- ⑭ 〈対談〉現代人の“人と暮らし”考／吉沢久子・高見澤たか子
- ⑮ 都市構造の保存とアメニティ／卯月盛夫
- ⑯ 住宅団地に求められるアメニティ／富安秀雄
- ⑰ 賑わいの場にみるアメニティ／望月照彦
- ⑲ 〈座談会〉都市のアメニティを探る
／藤森照信・枝川公一・松葉一清・徳田敦司
- ⑳ 長崎で提案した、あるいは提案したい私の構想／武基雄
- ㉑ バックナンバーの紹介／編集後記

表紙 ● Michel Delacroix © Lublin Graphics, Inc., Greenwich, CT, USA



人工渚のお台場海浜公園／撮影 伊奈英次

アメニティとはなにか

日笠 端

アメニティ概念の背景

アメニティということばを辞書でひくと、場所や建物、気候などの感じのよさ、快適さ、快感、および住宅地として価値を添えるもの——建築の様式、衛生環境、周囲の景観——という意味がまず書いてあります（新英和辞典／研究社）。アメニティという言葉は、もともとイギリスからきたものですから、通常アメニティという場合は、かなり広い意味をもっているということを、まず念頭に置いておいたほうがいいと思います。ただ、日本人は、外来語をその意味を深く理解しないで取り入れてしまうことがありますから、もう少し違った使い方をしているかもしれません。

では、イギリスでなぜアメニティということがいわれるようになったのか、その背景からお話ししましょう。イギリスで、アメニティということが盛んにいわれるようになったのは、産業革命以降です。とくに一九世紀末、イギリスでは都市に人口が集中して、さまざまな問題がこりしました。ロンドン、リバプール、マンチェスター

といった大都市および工業都市に人がどんどん集まってきた、都市機能そのものが大混乱をおこしたわけですね。

都市計画がまだ用意されてない時代ですから、道路も下水道もろくすっぱない所に、工場や住宅が進出してくる。土地の低い所には汚水が溜り、煤煙が空を覆うというように都市環境は劣悪をきわめ、おまけに住宅の供給も、いわゆる悪徳業者がのさばり、住民はひどい住宅に高い家賃を支払って住まなければならないという状態でした。そういう環境ですから、当然伝染病が蔓延し、多くの人の生命が失われました。

そこで、政府はまず伝染病対策として、衛生法規を定めました。そして住宅の改善を促す住居法を定め、つぎに都市環境を整備する法律をつくっていったのです。同時に、都市が醜く汚らしくなってきたことに対して、もっと住みよい環境をつくらうという気運が高まってきました。民間レベルでは、一八六五年にロンドン広場保全協会が、また一八九五年にナショナル・トラストが設立され、一九〇一年にはミース卿によってロンドン周辺の緑地を守る運動がこります。公衆衛生、住宅の供給だけでなく、人々のこのころをなごませる豊かなやぐつろぎ

をともなった、環境と人間生活との関連が強く意識されるようになったのです。

こういうような気運を醸成することに貢献した人としては、ウィリアム・モリスやレイモンド・アンウィン、ホースフォールがいます。とくにハムステッドの田園郊外の設計者であるアンウィンは、都市建設事業が成功していないと指摘したうえで、「これまでの都市計画には、美とアメニティが欠けている。貧しき者もパンのみによって生きるものにあらず。」と言って、都市の美的配慮の必要性を主張し、都市計画に重要な影響を与えました。

まちづくりとアメニティ

そうした背景をともなう、イギリスでは、一九〇九年に初めての都市計画法が制定されます。これは、その全体目標を「都市計画構想図の定める」土地および周辺の土地の利用、設計に関し、適当な衛生条件、アメニティ、利便さ」を確保することである、と宣言しています。これは明らかにそれまで行われてきた、E・ハワードの田園都市をはじめとする民間レベルの都市計画運動およ

び実験事業に強く影響されたことがわかります。

アメニティという概念が都市計画に導入されてきたいきさつは以上ですが、さきほどいいましたように、自然環境の保全ということが意識されるようになったこと

もアメニティを考えるうえで重要ですね。田園地帯を都市化から守る、そのために住民にとって必要と思われる土地や建物取得し保全して、道や共有地を利用する権利を守るための自発的団体が多数結成されました。今日い

ギリス最大の地主であるナショナル・トラストは、現在一七四〇〇〇の土地と二〇〇件の歴史的建築物を所有していますが、その基礎は既に一九世紀末にできていたのです。

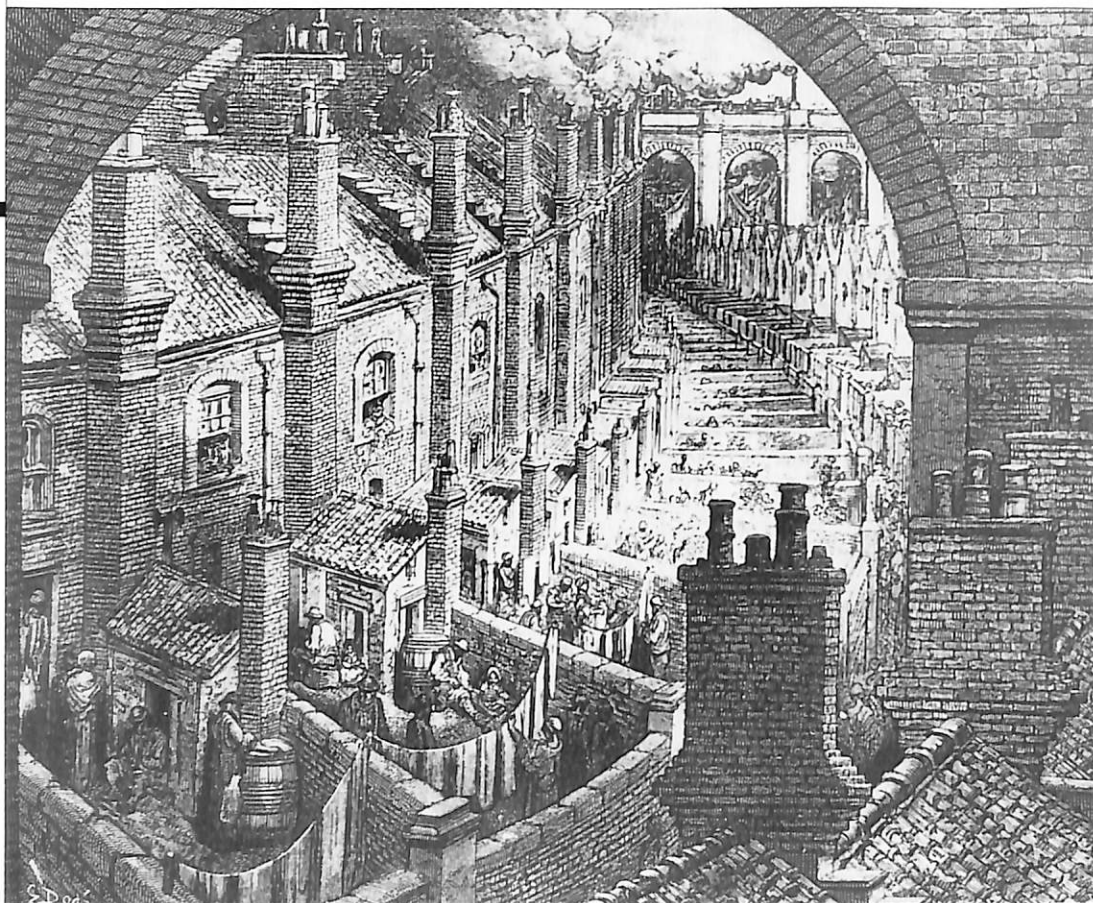
同じく、タウン・アンド・カントリー・プランニング・アソシエーションという民間団体がやはり、一八九九年に設立されて、都市、田園、地方の計画に関して活動していますし、一九五七年には、シビック・トラストが設立されて、主に歴史的建築物の保護に力をいれています。とくに最近では、一九七四年にタウン・アンド・カントリー・アメニティ・アクトという法律ができて、自然環境も建築物の保全も公共と民間が協力して取り組むことが重要であるという認識が確立しました。

アメニティということばをいえば、この他に樹木や森林の保全、また大規模な既成市街地のスプロールを規制し、田園地帯のアメニティを確保するグリーンベルトの設定も政策的に行われています。

イギリスでは、アメニティという概念が生まれてから、既に一〇〇年以上の歴史をもっているわけで、アメニティは広くそして深く国民に浸透しているといっていでしょう。しかし日本では住民が都市の環境に強い関心を示すようになったのは、公害問題や市街地のスプロール化によるさまざまな問題がふきでくる一九六〇年代になってからで、当然その対策がまず急がれ、アメニティということがいわれ始めたのは、最近になってからです。したがって、法律的にも定かたではないし、まだその概念も十分に浸透しているとはいえません。けれども、今後は日本でもアメニティを考慮した都市づくりを考えていくべきでしょうし、そういうことが強く要求されてくるだろうと思います。

（ひがさ・ただし 東京大学名誉教授）

環境改善などを求めるアメニティ論が論議され始めた、
19世紀末ロンドンの貧民街。1872年のギュスターヴ・ド
レの版画／相模書房発行『図説都市の世界史4』より



誰のための道路か

岡 並木

住民が必要とするサービス

まず、都市計画の専門家がゾーニング。そしてそれぞれのゾーンに、えいやとハードの画を描く。これまで多くの都市計画が、そういう順序で作られてきました。しかしここ数年、人間が暮らす街を作るのに、こういう仕方ていいのだろうか、という疑問が生まれてきています。その街に住み、働く人たちに、その街はどんなサービスを提供する必要があるのか。それをまず徹底的に洗い出します。この作業には、都市計画の専門家以上に、人間の心理、生理、行動、暮し、文化にかかわるさまざまな分野の専門家が、参加する必要があります。

そして提供すべきサービスの内容の整理が済んだところで、こんどは、そのサービスを提供するための仕掛けを、どうするか考えます。そのつぎに、その仕掛けを現実化するためのハードの検討に入るといふ順序です。

いくら、そこに水辺が作られても、緑が植えられても、それだけでアメニティの優れた街とはいえません。その街に必要なサービスを十分に検討し、そのサービスを受

けられるように作られた街こそ、アメニティの優れた街といふことができます。

獣道が示すこと

人間の日常生活は、主として右の脳による直感的な働きによって営まれているといつていいのです。それに對して、これまでの計画は、都市計画も、道路計画も、交通計画もどちらかというと、左大脳によって理論的に組み立てられてきたといつていいでしょう。もちろん右大脳の言い分だけに計画が頼っては危険です。しかし、今までの計画は、あまりにも人間の自然な欲求を無視しすぎてきた、といつていいでしょう。

たとえばこんな例があります。東京の広尾に超高級マンション街が生まれました。歩道の緑にはさつきが切れ間なく植えられました。ところが暫くするとさつきのベルトがどこどこ踏みつけられて白い土になってしまいました。その場所はすべてそれぞれのマンションの玄関のすぐ前です。つまり、配達やタクシーの乗降に必要なところに、さつきの切れ間を作っておかなかったから

獣道が生まれたのです。住民は踏みつけられた土のところにレンガを敷いてくれ、と渋谷区役所にいいました。ところが区役所は断ったばかりか、低いさつきを、またげない高さの植木に変えてしまいました。

これはこれまでの計画や管理のありさまを、象徴したできごとです。なぜ獣道が生まれたのか、という反省を忘れ、相変わらず、獣道は低いモラルの人々が作るという程度の認識しか区役所にはないことを物語っています。もうひとつの例を紹介しましょう。東京の246号線の青山通りと呼ばれる区間が、数年前に再整備されました。幅の広い中央分離帯が作られ、そこは見事な植栽で覆われました。また歩道が拡幅され、ここにも緑がきれいに植えられました。自動車で走ると、大変アメニティの優れた道路に見えます。

しかし車を降りて歩道を歩くと決して快適ではない。相変わらず自転車が、強引に走りまわっているのです。なぜ、これだけ金をかけて改造するなら、自転車道を合わせて作らなかったのか。スペースが足りないのなら、あんなに幅の広い中央分離帯なんか作らずに、その分と歩道の拡幅分を合わせて自転車道にすることを、なぜ考え

なかったのでしょうか。

ことに街の中の道路は、自動車だけが快適に安全に走ることができれば、いいのではないはず。歩行者にとっても、自転車にとっても、快適で安全である必要があるのです。

限られたスペースのところに作らなければならない道路です。その地域が必要とするさまざまな機能を、バランスよく組みこむことを考えて欲しいのです。既存の安全至上主義や緑至上主義に惑わされては、アメニティの優れた道路は生まれません。

歩行者天国の失敗

最近、歩行者天国をやめるところがめだつてきました。その最大の原因は、そのためにかえってひとが集まらなくなってしまうからです。つまり、クルマによる利用客を排除してしまつたからです。歩行者天国というのは、歩くショッピングを楽しむことを目的としていますが、それは決してクルマとの共存を拒否するものではありません。そのためには、歩行者天国と近隣からクルマで来るユーザーを受け入れる駐車場が、ぜひとも必要なのです。そこが解決されないまま、とにかくクルマを締め出せ、ということをやってきた報いが、いま、集客力の減少というかたちにあらわれたのだと思います。

アメニティの高い道路をつくることは容易ではありません。ひとつずつ問題を解決していくことがアメニティをめざすことにつながるのです。そのためには、まず、誰のための



写真上は246号線青山近辺。中央分離帯の緑がいていて、景観的には美しい。一方写真右のドイツ・ベルリンの道路は中央分離帯がなく、その分歩道と車椅子専用道の他に自転車専用道路を設け、人間的アメニティに配慮している
撮影(上) 伊奈英次 (右) 徳田敦司

多様な水との出会いに向けて

陣内秀信

身体的アメニティ

アメニティという概念は、ヨーロッパ的な、そしてきわめて近代的な概念です。そのアメニティが、現在日本で非常に注目されている。街づくりの際のひとつの大きなテーマになっている。そして、その中には、当然のことなのですが、水や緑といった自然環境の問題も含まれています。しかし、例えば江戸時代を考えてみてもわかるように、人間の心に語りかけてくるような素晴らしい環境は、本来は身の回りにたくさんあったのです。なにもイギリスからアメニティという概念を取り寄せなくても、もともとあった。そしてそれは、西洋的感觉に裏付けられた秩序による、整った美しさとか清潔なといったものではなかった。いってしまえば日本人本来の、非常に

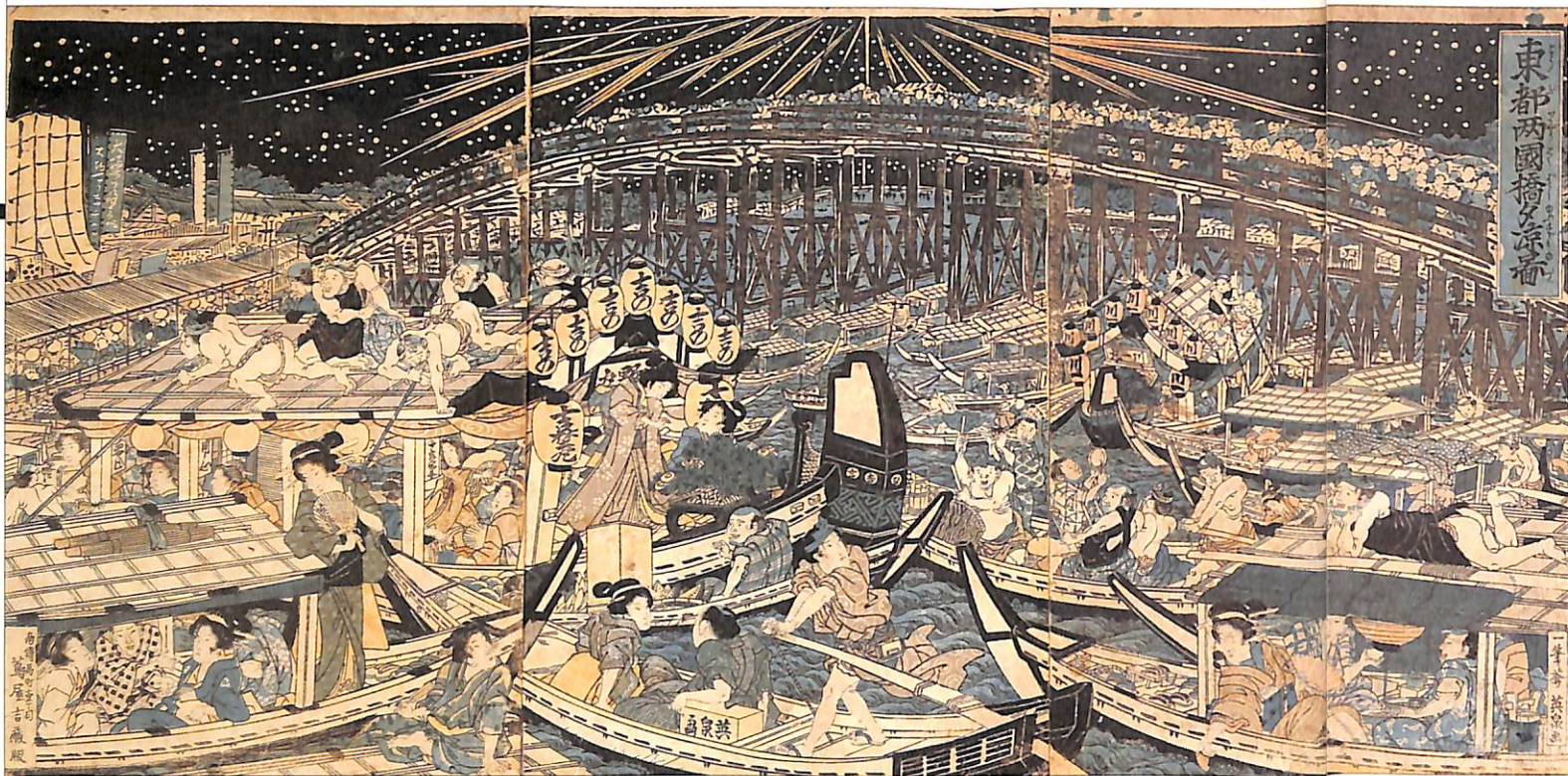
水との付き合い

水辺の問題に絞ってみましょう。〈江戸—東京〉の基底には、漁師の文化があったからだと思うのですが、一般的に〈江戸—東京〉には海とともに繁栄するといった思想がありました。三社権現ができたのもその現れでしょうし、海と結びついたパフォーマンスは今でも残っています。また、セーヌ河のバトゥー・ムシュのように、水上で食べたり飲んだりすることも、日本人は昔からやっています。一六五〇年頃に描かれた「江戸図屏風」というのがありますが、そこには遊郭とかお茶屋さんの前で船を浮かべて遊女たちと遊んでいる様子が描かれています。また、屋形船の宴会は、人間が水の上で解放感に

浸るという意味では、ひとつの文化だとさえいえるでしょう。先日ニューヨークから来た、都市計画のウォータフロント・セクションのディレクターも驚いていたのですが、東京湾は釣り人が非常に多い。釣りばかりでなく、江戸時代には品川や深川では潮干狩りまで盛んだったのですが、とにかく、都市の中で大勢が釣りをするとするのは大変珍しいことです。そして、もうひとつつけ加えると、先ほどの神社とも関係しますが、水には身を浄める、罪を流す「禊」としての役割もありました。それは、不浄のものを流したり、ある意味で異界との境界線といった意味ももっていたのです。これらのすべてが、日本人の水との付き合い方だったのです。

都市の単一機能化

しかし、こういった付き合い方は、西洋にはなかったのではないのでしょうか。これらの付き合い方というのは、現代でも少しは残っているのですが、大きくは明治期以後の近代化の動きとともに後退していきました。産業、経済、流通だけでなく、遊び、文化、民俗的世界、信仰



江戸時代の人々にとって、水辺はこの上もないアメニティであった
／「東都両国橋夕涼図」 漢斎英泉、名古屋市博物館所蔵

といった多様な付き合い方が、ひとつの単純な機能に限定されていったのです。それは、隅田川であれば、物流、倉庫、工場のようなものです。それらが下流のほうから徐々に支配的になってきて、いろいろなものが追い出されてしまった。そして水は汚れ、煙が立ち上り、風光明媚でなくなり、魅力がなくなる。そうするとますます、遊び、文化的要素が減少し、工業地帯的になってしま

アメニティを超えて

このようにして、きわめて貧しいものになってしまった東京の水辺に対して、なんとかしなくては考えられるようになってきたのは、七〇年代になって環境といったことが意識され始めてからです。そしてその延長上にアメニティということで、単なる機能的都市を超えるものが意識されるようになってきた。しかし、私たちがさらに意識すべきは、西洋流の、整えられた清潔なという面だけではなく、日本人が本来もっていた、多種多様な水との付き合い方です。そうした、西洋流のアメニティでは捉えきれない、感覚、感性、経験というものが掘り下げることによって初めて、日本人の喜び、水との出会いが実現できるのだと思います。

(じんない・ひでのぶ 法政大学助教授)

抱かれてみたい環境をつくる

都市にアメニティを求める……、ここ数年来盛んにいわれていることです。しかし、アメニティというのは、人によってそれぞれ異なった捉え方をされます。私はランドスケープデザイナーという立場からこれを考えるわけですが、その場合「ひとりでも多くの人が抱かれてみたい」と思う環境をつくることではないかと思うのです。これはランドスケープデザインの定義にもとれるでしょう。

エコロジカルな視点で見る都市

ランドスケープデザインとは、ひとことといえば「人間と環境の関係を芸術的、科学的に究明し、また理解してその相互の関係を総合的に調和ある形で空間化していくこと」です。芸術的というのは、人がそれを見たときに美しいと感じるようにすること。そして科学的というのは、エコロジカルなものをベースに置いて環境を捉えていくことです。もっとわかりやすくいえば、生物の一人としての人間が、都市で生活していくときに、どういう条件がそなわれれば一番快適な状態になるのかということとを基本に置いて空間をつくることです。この後者の科学的な空間づくりということが、ランドスケープデザインにおいても、アメニティと都市を考えるうえでも、実



人工的な景観アメニティ（人工渚+植栽のあるお台場+対岸の近代ビル群）／撮影 伊奈英次

は重要なキーワードなのです。

緑の空間を演出する意味

たとえば身近なところで、緑の問題を例にとってみましょう。都市にアメニティを、ということと最近いたるところで緑化計画が進められています。しかし、やみくもに緑を増やしても、そこには何の意味も認められない。ちよつと皮肉に解釈すれば、いま叫ばれている緑化という言葉には、建物がどんどん建って見栄えが良くないから、緑で化（ば）してしまおうというくらいの意味合いしかとれないのです。だったらなにも本物の樹木でなくても、ホンコンフラワーでもいいわけです。でも、それでは視覚的な要素としてはクリアーしているけれど、生物的な営みというのは全く無視されてしまっています。樹木があれば、そこに昆虫や小鳥などの小生物がやってくる。緑に柔らかな目ざしがさしこんで、どこからか小鳥のさえずりが聞える。そういう場で人は憩いの時間を過ごす。緑を配する意味というのは、本来そういう部分にこそあるわけで、ただ見た目で美しければいいということではないのです。

それでは本物の樹木をただ増やしていけばいいかというと、そうでもない。都市の基盤には人工的なものがあるって、それを合理的につかいこなすことで機能しているのです。ですから、そこに緑なり水なりという人工的なものと相反した要素をむりやり押しこんでいくと、都市

生物のいる風景のデザイン

小林治人

の機能が低下する可能性も考えられます。したがって自然と人工的なものをバランスよく共存させることが大切だといえます。何年か前に、都内の緑被率を調査したのですが、それでいくとだいたい全体の三〇%くらいが緑で占められていると、おおむね良好な環境と感じられるというのです。世田谷あたりの緑被率は三〇%台で、かなり理想的ですが、都心部になると、わずか一〇%台。これだと緑を感じられない。この都心部の緑化というのは、ひとつの課題だと思います。

自然のつきあい方

しかし、都市が抱える課題はそれだけではありません。

なぜなら、いくら良好な緑の環境をつくっても、都会に住む人がそれと接する作法を知らないからです。表面的には緑化を歓迎するのですが、いったん事が起ると、こんなものはいらないという。単純な例をあげるなら、樹木に毛虫がついて困ると、そのとたんに切ってしまうということになる。つまり自然と親しむために多少の我慢はやむをえないという気持が日本人にはない。どうも対立的で殺伐としている。ある程度、譲る気持がないと自然は確保できないのです。そして、そうした自然とつきあうマナーを身につけることが、今の私たちに必要とされ、またそれがアメニティを高めることにつながっていくのではないのでしょうか。

(談)

(こばやし・はると ㈱東京ランドスケープ研究所代表取締役社長)

第六感の住宅建築

宮脇 檀

アメニティはエア・コンから始まった

建築でアメニティということがいわれはじめたきっかけは、戦後のアメリカでエア・コンディショニングが普及するようになってからです。生活に余裕が出てきて、オフィスや工場、あるいは住宅にまでエアコンが入り込むようになり、空気や光、音といったものを建築のデザインに積極的に組み込んでいこう、という動きが出てきました。つまり、それまでの視覚（目に見える構造物）だけの建築に対して、聴覚や触覚や臭覚といったものを建築計画にもっと組み込む必要があるのではないかと、ということがいわれ始めたのです。それを五感を満足させるという意味で、五感建築と呼んだりしたわけです。つまり、視覚以外の感覚を満足させることによって快適な空間をつくらうと考えた。

たとえば、音の反響を防ぐにはなにを貼ったらいいか、温度や湿度はどのくらいが過ごしやすいか、空気の流れをどうつくるか、そういうことがいろいろ研究されて、ひとが快適と感じる空間の具体的な輪郭が、ある程度数

値化されてわかるようになったのです。建築では、五感というレベルでは、ある程度はそれを満足させるようなところまではいきました。ハイテクの技術を駆使したオフィス・ビルは、確かに、その意味で五感建築のモデルになっている、といっていいでしょう。

動物的本能・思い出を大切に

ところで、住宅という分野を考えてみると、今といったような快適性だけでは、アメニティというのは確保できないと思うのです。五感のもっと奥にある、六感のようなものが住宅には必要なのではないか、と思うのです。いわゆる気配のようなものと言ってもいいような、決して数値化されないようなものが、どうしても住宅には必要になってくる。住宅という建物は、建築のなかでもとりわけこの六感が強く要求されるものだ、と思うのです。では、住宅におけるこの六感とはなにか、ということになります。それはいろいろな方ができると思いますが、ひとつは、ある意味での単純さからくるものです。

住宅という建物は、建築のなかでも最も単純素朴なものです。というのも、ひとの生活のきわめてベーシックな部分を入れる容器だからです。非常に保守的であり、頑固です。なぜならば、ひとの生活の根みたいなのは、結局のところ動物的本能に根ざしているからです。機会があるところの話をよくするのですが、日本の台所には、吊り戸棚が壁いっぱいにつくってあります。ところが、そのうちちゃんと使われているのは半分くらいで、残りの半分はたいがいどうでもいいようなものが入っているのです。どうしてかという、これが今いった動物的本能とかかわっているのです。ひとの手というのは、曲げるのには有利ですが、伸ばすのには不利にできています。ですから、重いものを下から腰のあたりまで持ち上げるのはできるのですが、それをさらに上へ持ち上げるのは苦手なのです。ということは、重いものは下の方へいく傾向にあり、絶対に上の方にはいかないのです。

台所の道具や材料などの重いもの、お米も油もすき焼鍋も吊り戸棚にいくことはまずない。たいがいものは下へいく。そうすると、吊り戸棚はガラガラということになるのです。それは、ひとのからだのなかにある基本

のつくりがそうさせるのです。住宅は、そうした動物的な本能と深く結びついているのです。

もうひとつ例を出すと、老人が暮らす住宅を観察すると、メモリアルなものが夥しいまでにディスプレイされていることに驚かされます。他人にとってはどうしてもさそうなのが、いっぱい飾ってある。しかし、それらは他人には無価値であっても、本人にはかけがえのないメモリアル性をもったものの集積なのです。それらが、美しくないからといってかたづけられてしまったとしたら、その空間は老人にとっては全く快適でない空間になってしまってしまう。老人にとって自分の記憶の集積のなかにいることが、快適性を満足させることなのです。

住宅に求められるのは、五感プラスアルファ

住宅というのは、このようにちょっと考えただけでもオフィス・ビルなどと根本的に異なるものです。その対極にあるといってもいいかもしれません。たとえば、江戸時代から残っている農家を解体して修理してみると、幾世代にわたってつくり変えられてきた様子がわかります。四本の柱以外は、全部つくり替えられたもの、というのもあるほどです。家（住宅）というのは、常に前のものを後へつないでいく、そうやって生き続けてきたということがわかるのです。それが家の快適さの非常に重要な部分だと思うのです。そういう記憶のようなものが、先程いった気配、あるいは六感なのではないかと思うのです。

住宅におけるアメニティというのは、五感を満足させることであると同時に、それ以上に気配や六感に対して気を配ることなのではないでしょうか。そして、それは今後ますます強く求められてくると思うのです。（談）

（みやわき・まゆみ 旬宮脇檀建築研究室代表取締役）

思い出にアメニティが感じとられる、ある老人の部屋／撮影 村岡秀男



旅の宿と

文と写真
徳田敦司 Comfortable

Amenityという言葉を知ると、私は何年か前、ロンドンを旅した時のことを思いだす。

ロンドンに住む旧知のイギリス人を訪ね宿を紹介してもらった。

その時、彼は私にこう言ったのだ。『お世話するホテルは、部屋は広くない、しかし、Very Comfortable、だからきつと思いいに残る満足な数日を過ごすことができると思うよ』。私は、ちゃんとしたホテルしかとれなかったのだ、いいわけのために『Very Comfortable』という言葉をやむを得ず使ったのだらうと思っていた。

彼がよこした地図をたよりに辿り着いたホテルは、中規模で外装は化粧直しをしたらしく立派に見えるが、少なくとも100年位前の建物のように見えた。回転扉を入り、フロントで宿帳に登録し、鍵を受け取り、部屋に入り、荷物を解き、リラックスしないで、だに替え、おもむろに辺りを観察してみた。

なるほど、シングルの部屋は広くない。しかし、旅の荷物スペースをとってもそこで生活するのに狭すぎるというほどでもない。むしろ無駄な動きをしないですむだけ効率がいい。

ロケーションは地下鉄の直ぐ近くで、しかも、リージェント公園の隣で緑のオープンスペースがホテルの庭のように広がっている。

部屋の設備はどうだろうか調べてみた。まず水回り、浴

槽・洗面・便器ともに清潔かつ衛生的、更にうれしいことにタイル・石鹸は化粧セットも銘柄品が十分に用意されている。水はもちろんのこと、湯も大きな蛇口から勢いよく出てくる。シャワーの勢いも十分だ。

ベットは、セミダブルよりやや大きく、堅さもほどよいクッション、清潔なシーツ、純毛の毛布、ダブル重ねの枕。

調べもの・メモの整理もしたい、ビジネスユティリティはどうだろう。ホテルにしては大きめの机セット。照明器具は大方のホテルのようにフロアスタンドと兼用でなく、作り付けて机の中心を適確に照らすように調節してある。

天井・壁は落ち着いた色合いの壁紙で仕上げてある。床のジュウタンも上物ではないが色合いが良く、なによりも感じがよいのは清掃が行き届いていることだ。

窓は、二重窓。窓枠は木製で何回か塗装を繰り返した跡が残っている。スチールの枠にとりかえないで、木枠を残すことによって歴史を刻んだ建物本体と新しい装いとなった部屋との時代の掛橋の役を果たしているように思えた。

あまり書き立てているとあいつはヨーロッパ・コンプレックスで、ものを見る目が狂っていると間違えられても困る。

要は、このホテルは『ここで生活するうえで必要なものは、すべてあるべきものがあるべきところにあるという条件を満たしている』と言える。

言葉を変えて言えば、交通・環境・雰囲気・衛生・生活用具など心地よい生活を送るもろもろの要件を整えているというのだ。

宿の主のホスピタリティの神髄を見る思いがした。住まう側から言えば、これはVery Comfortableそのものであり彼の言葉に嘘偽りはなかったのだ。

こういった状況がアメニティの概念の一部を物語っているのではないだろうか。

(とくだ・あつし 財第一住宅建設協会常務理事)

ナショナルギャラリー前



リージェントパーク



現代の「人」と暮らし「考」

吉沢久子
高見澤たか子

戦後における社会構造の変化は大きくそれは様々な部分に影響を与えました。たとえば「コミュニティ」に対する意識も戦前と現在では大きく違っています。たくさんの人々が集まっているにもかかわらず人に疎外感を与えずにはおかぬ都市。このような状況の中で、私達は真の「アメニティ」を得ることができているのでしょうか。そこで「アメニティ」と「コミュニティ」の関係について吉沢久子と高見澤たか子両氏のお話を通して考えてみたいと思います。

利己主義のはびこる現代

高見澤 コミュニティとアメニティ、どちらも曖昧で捉え難いものだと思いますが、私たちが気持ち良く暮らしていくために欠くことのできない概念ではないでしょうか。たとえば高齢化の問題にしても、現在日本の人口の約一割強（一〇％）を六五歳以上の高齢者が占めているといわれていますが、これがあと三〇年もしたら二五％近くになるらしいのです。四人に一人が六五歳以上という超高齢化社会を迎えようという時、今のような地域の

連帯がない状態で大丈夫かしらと、不安に思うのです。近隣とのつきあい、家族同士のコミュニケーション、こうしたものがなんとなくギクシャクしているでしょう。挨拶ひとつにしても、みんなどうしているのか、わからないようなところがありますね。そして一方では、ハイテク化がどんどん進む。それを考えると、オーバーかもしれませんが、危機感のようなものを感じるのです。

吉沢 そうですね。高見澤さんのおっしゃることは私も同感です。たとえばボケ老人の問題。これは昔からあったことなのですが、昔は今ほど大きな社会問題にはならなかった。

なぜなら家がだいたい三世代同居だったということもありませんけれど、昔はムラ社会という日本独特のコミュニティが存在していて、その地域の人たちがみんなてケアしていたわけです。自分たちの生活はみんな守らなければならぬという意識があったんです。そういう意識が今はないですね。自分の生活だけを守るという考え方は、このような現代というのは、危機的といっても大袈裟ではないと思います。

高見澤 地域の支えがなくては、老夫婦だけの生活、あるいは一人暮らしを安心して過ごすわけにはいかないのではないのでしょうか。子どもの問題にしてもそうです。

子どもが川で溺れたとか、誘拐されたとか、最近そうした事件が頻発していますけど、それも一人ひとりが地域を支えているという意識が薄れてきたことと無縁ではないと思うのです。つまり自分の子どもだけをだいにする、自分の子どもだけ見ていけばいいという発想ですね。個人主義というよりは、エゴイズムだと思います。一億総サラリーマン化で管理主義が徹底し、自分のことさえ考えればいいんだという非常に視野の狭い、しかも人間らしい潤いが失われつつあるのが、現在の社会ではないでしょうか。コミュニティ＝共同体というのは、管理された社会とは対極にある、お互いに想像力の働き合う有機的な関係が成り立つ場だと思うんです。

失われていくムラ社会のルール

吉沢 昔のムラ社会のコミュニティというのは、うるさいといえはうるさいものでしたよね。どこの誰がいつ何をしたかまで、みんな知っているのですから、干渉され

すぎてうるさいというのは確かにありました。だからといって、今みたいに全くの個人主義もどうかという気がします。普段の生活には支障がないけれど、いざという時に、やはり困るんじゃないでしょうか。よくきく話ですけど、何か事が起こった時に、ご近所の方にいろいろと面倒をみてもらって、それがとても助かったから、ご近所づきあいを始めたというケースがけっこう多いですね。そういうことがきっかけで、地域の結びつきに発展するというのでも、もちろんいいと思います。でもそういう結びつきは案外もろいんじゃないかしら。つまり、地縁によるお互いの自発的な助け合いの気持ちではなく、損得勘定から起こっているわけですから、自分にとって損だったりと、すぐに消滅しちゃうような気がするんです。

高見澤 損得勘定というので思いましたのですが、以前マンションに住んでいた時、とてもうるさいおばあさんがいたんですね。「うちは一階だからエレベーターは使わない。だから管理費からエレベーター代をひいてほしい」

というんですよ。

吉沢 損得勘定でものごとを考える典型的なタイプね。

高見澤 それが、ちょっとした問題になって「じゃあ上の階に住んでいるお友だちを訪ねる時、あなたはエレベーターに乗らないんですか？」なんて話にまでなっちゃった……。また防災訓練のような場合にも、「うちは夫婦だけだから、いざという時には勝手に逃げますからおかまひなく」なんていう人もいますね。共同住宅だって、いわば一種のコミュニティですね。よそと全く関係なしには暮らせないはずなのに、自分の欲をむきだしにして自己の利益ばかりを主張する、他人のことはどうでもいいわけです。

損得勘定というモノサシ

高見澤 今の世の中は、すべて損得勘定に支配されているような気がしますね。挨拶をするのだって、ほとんど無意識に利害関係で計算したりするでしょう。この人は

吉沢 久子
(よしざわ・ひさこ)
生活評論家



高見澤たか子
(たかみざわ・たかこ)
生活評論家

挨拶しても得にならない、およそサービス精神がないんですね。これはやっぱり日本が島国で、単一民族国家だからじゃないでしょうか。西欧やアメリカの場合は、いろんな人種が混ざり合っていますね。ですから挨拶がとっても重要で、お互いに敵対関係ではないということをなにかの形であらわさなければならぬ。日本と欧米の社会を比べた時に、いかにも違うと感じるのは礼儀作法はあっても「社交」が存在しないということだと思います。吉沢 そういうつきあいの礼儀作法は、戦前のムラ社会にはあったわけですね。ところが戦後、日本全国一律に都市化が進んでしまつて、それにふさわしいコミュニティができなかった。できたものは、戦前のムラ社会を引きずっているつきあいのシステムと、それを古いものとして否定しようとする考え方のせめぎあいです。それがそのまま都市に持ちこまれたのは、都市はいろいろなムラ社会出身者の集まりですから。それにしても、あまりに早かった社会構造の変化についていけずに、ただ流されているうちに新しい礼儀作法もできずにきたのですね。新しいコミュニティの形をつくりだせばいいわけなんですけど、高度経済成長を至上命令として働かされてきたものは、損得勘定ばかりを考えて、自分たちだけで生活しているのに、助け合いなんかいらぬ、そんなこと損じやないかという考え方になったのでしょうね。だけど、こういうあり方というのは、いざ何か問題が起きたらとても困るわけです。もし本当にアメニティを考えるなら、いまのようなコミュニティの状態ではダメだと思います。

高見澤 そうですね。たとえば私たちはみんな税金を納めていますけれど、それについてどんな意識があるかというと、高いというだけでしょう。自分たちの生活をきちんと考えているなら、自分の納めているお金がどういうふうに使われ、どういう形で自分たちの生活に還元されるのか、見極めていくのが本当ではないでしょうか。

つまり自分もその地域の住民であるという帰属意識が希薄なせいだと思うのです。税金を納めるのは、個人では改善できない部分……、道路とか公園とか、あるいは福祉のサービスとか、つまりは、アメニティ＝快適性を高めるためにお金を使ってもらいたいわけですね。でも、その辺の追求も私たちは曖昧ですね。共同住宅の自治会などでも、協力しあつて少しずつ住みやすくしようとしても、集つて話し合うのはおっくうだ、管理費を納めているのに、さらに労力を出し合うのはいやだとかいう人が少なくない。つまり、目先の損得勘定には敏感に反応するくせに、力を出し合つてコミュニティをつくりあげていくということには、実に怠惰ですね。その時は面倒だった時間をとられたりしても、長期的な目で見れば自分の生活にとってプラスになるということがわからない。

吉沢 建設的じゃないんですね。

高見澤 私たち日本人は、つくづくエコノミックアニマルだと思ふ時がありますね。

精神的なゆとりがアメニティを育む

高見澤 なぜ、こんな風になつてしまったのか、考えてみると、どうも効率性ばかりを追いかけてきたゆとりのなさが原因じゃないかという気がするんです。昔なら、家庭なり地域社会の中で教えられて自然に身につけていた常識が、あくせくした暮らしの中でみんな抜け落ちてしまった。その常識の積み重ねが、つまりは文化だと思ふのですが、それを取り戻さないことには、コミュニティは成り立たないし、ましてやアメニティだつて獲得できないんじゃないかしら。

吉沢 そうですね。当然あるべき暮らしの常識みたいな



垣根越しの対話／撮影 伊奈英次

ものが抜け落ちてますよね。最近、子どものしつけができていないと言われるけれど、それなどは最たる例ですね。私たちが子どもの頃はよく叱られたでしょう。親にはもちろんですけど、近所のおじさんやおばさんにも厳しく叱られたものです。今の子どもは叱ってくれる人がいないから、とてもワガママに育つてますね。

高見澤 よその子どもを叱りつけようものなら、すごい勢いで親がとんできて逆にこちらが怒鳴られる。「うちの子どもが何をしたっていうんだ」と。本末転倒ですよ。

吉沢 親の方に常識がないとしたら、そんな親に子どもをきちんとしつけられるわけがないですね。家庭でそういう教育ができないなら、社会や学校で教育を考えなければいけないはずなんです。しっかりと社会生活のマナーを教えることだつて教育です。弱い立場の人を守らなければいけないとか、挨拶をするとかの社会のコンセンスを身につけさせる場を設けないと、日本の社会と

いうのはダメになつちゃうかもしれません。いま私たちみんなに必要な、思いやりの気持、優しさ、精神的なゆとりみたいなものは、競争しなければならぬ受験勉強中心の学校では身につくはずがないですね。それはアメニティとも決して無関係ではないのです。

高見澤 結局アメニティ云々といつても、みんなが自分たちの暮らしの根の部分に目を向けなければ、何も始まらないという気がします。誰かが、よくしてくれるだろうという甘えや、自分のことしか考えられないエゴイズムからは、コミュニティづくりもできないし、アメニティも生まれません。

吉沢 理想的なコミュニティづくりも、表面的なことだけを問題にするのではなく、私たちみんなの意識をどうするか、そこから考えていかなければ、アメニティもまた実現しないということでしょうね。

都市構造の保存とアメニティ

卯月盛夫

景観保存というものを考える場合、そのときの「景観」には、目に見える景観と、目に見えない景観という二つの面があることを考える必要があるでしょう。目に見える景観というのは、いうまでもなく表面的で風景的なもので、建築に限れば、それはファサードとか建物の形態といったことになります。それに対して目に見えない景観というのは、心理的な、あるいは人の記憶に関わるようなものです。確かに目に見える景観と目に見えない景観というものを意識したにしても、結局は建物を通して実現するという意味では、建物の話になっていくのですが、それでもそういった違いを意識するしないでは随分と違った結果になると思います。

IBAの保存哲学

IBA（ベルリン国際建築展）を例に説明しましょう。IBAとは、西ベルリンの都心を住宅地として再生しようとする都市計画プロジェクトで、敷地三一、五km²、参加建築家二〇〇人、総工費一、六〇〇億円という大規模な事業です。一般的には、景観保存といったときに、古

の表象の観点でしよう。しかし、都市の構造ともいうべき、都市の平面や立面についての問題の方が、都市に対する人間の記憶にとつては、より根本的なのです。IBAでも、言葉は違いますが、強調されているのはその都市構造ともいべきものの保存です。建築の表象については、むしろそこは自由であって、それこそが現代の建築家が自由につくり出していけばよい部分なのではないかと考えています。その方が時代に即しているのではないかといった、基本姿勢なのです。

過去の批判から再構築へ

たとえば妻籠は三つの側面を全て保存しようとしたものです。しかしそれは都市ということを考えるまでもなく、現代の生活には合っていないと思います。それを明確に、平面と立面構造については重視するけれども、表象に関しては自由にしようと思出したのは、極めて画期的なことだと思います。そうした方法論を、IBAでは「批判的再構築」と名づけています。とにかくなんでもかんでも過去の方がいいんだと考えるのではなく、過去のものに比べて現代のものでもよいものがあればそれを取り入れる。いつてみれば過去について批判した上で、よいものを残し再構築していく。そうした考えなのです。私の景観保存についての考え方はIBAのコンセプトと非常に近いものなのですが、とにかく技術的な面だけではなく表面的なことだけを見るのではなく、都市の構造やコンテクスト、そこには物理的な意味だけでなく、経済的な、あるいは社会的な意味も含まれるのですが、そういったトータルなものに目を配る必要があるのではないのでしょうか。そういったことが、本来の意味での保存のアメニティにつながっていくのだと思います。（談）

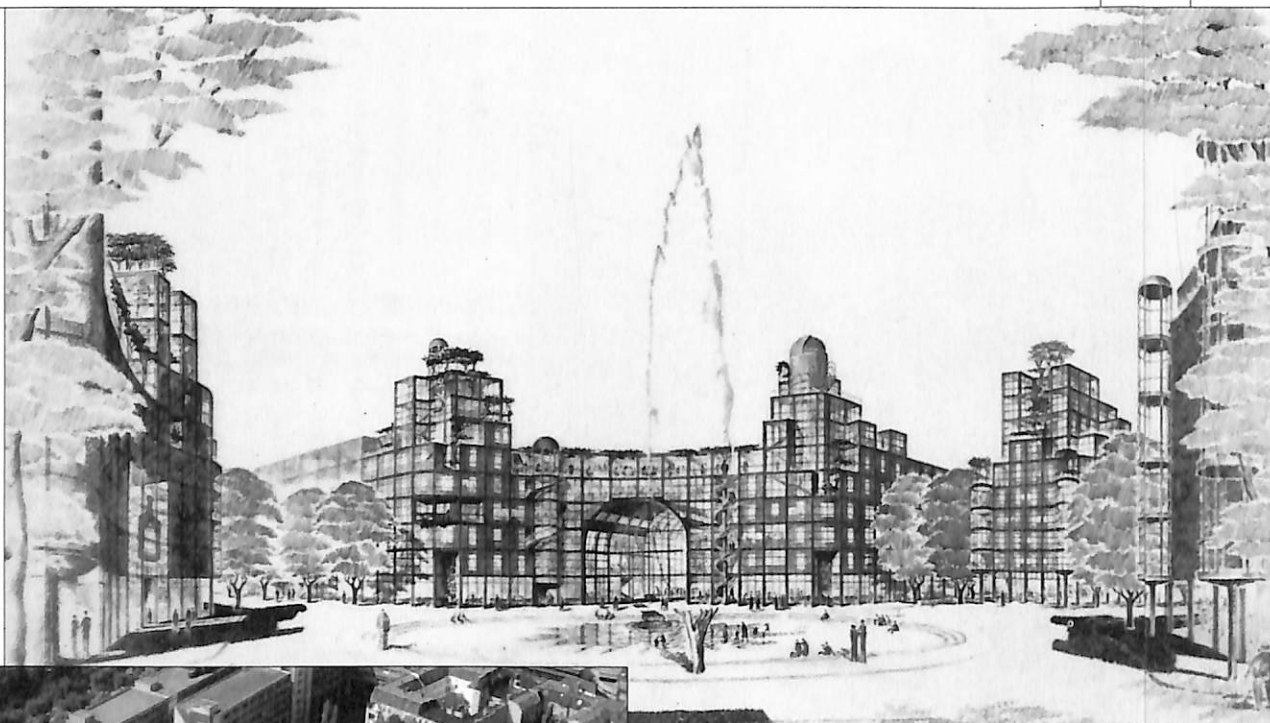
（うづき・もりお 世田谷区役所都市デザイン室）

い家並みや屋根の形を揃えるといった、デザイン的な面ばかりが強調されがちです。しかし、先ほどの記憶に関わる景観というものを考えれば、例えば歴史的なコンテクストの保存というようなかたちでの解釈も可能となります。IBAでは、それは道路のパターン、広場の位置や形状と考えます。つまり、昔広場のあったところでは、周囲は全て新しい建物にするけれども、広場はそのままの大きさや形で保存する。これは景観保存というよりは、都市構造の保存とでもいった方がよいのかも知れませんが、時代は変わったわけですから、建物は新しい物になるべきだろう。しかし、ベルリンがひとつの都市として計画された時点でベルリンが持っていた道路や広場という、いつてみれば都市の平面構造といえるものは保存することが重要だ。ファサードが問題なのではなく、ファサードはもっとモダンでもいいし、昔住宅であったものに対してそれが需要に応じて商業ビルに変わっても構わない。そういう表層的な景観ではない、都市の本質的コンテクストあるいは構造といったものの保存こそがアメニティ

とつながるのではないのでしょうか。

景観と都市構造

都市の景観計画の立案にはいくつかのカテゴリーがあります。まず、今の都市の平面という問題。都市をひとつの建築とみなし、その平面について考えるわけです。これは繰り返になりますが道路や広場の問題といえるでしょう。次に、ひとつの建築とみなしたからには、その立面・シルエットということについても考える必要があります。つまり、どれくらいの高さで、どういったボリュームであったか。立面的構造の問題。平面と立面の問題は、都市の空間が道路空間によってどうやって区切られ、またどういったボリュームで構成されているかといった問題です。こうした問題の次に個々の建物の問題がきます。屋根の形がどうなっていて、ファサードがどうなっていて、窓のデザインがどうなっているか……、都市景観といったとき、もっとも強調されるのがこ



上：広場を囲む建物の完成予想図

左下：写真中央の広場上の空地には新築、その他の建物はファサードだけを新築に合わせ改築し、歴史的な広場のたたずまいをいかす（ドイツ・ベルリンのプラガープラッツ）

／資料は2点とも『a+u』87年5月増刊号より転載



住宅団地に求められるアメニティ

富安秀雄

昭和四〇～五〇年代における住宅事情の変化

人が住まうところにアメニティが求められる。現在では当然のように考えられていることですが、実は昭和五〇年代に入ってやっといわれたことなのです。というのも、昭和四〇年代までは住宅数より世帯数の方が多かったからです。つまり当時は住宅が不足していましたから、とりあえず住めればいいということで、住環境など考えない建物がどんどんつくられたわけです。ところがこの状況は長くは続かなかった。というのも今度は住宅数が世帯数を上回ってしまったからです。こうなると、今までのように、必要最低限の条件さえ満たせばいいというわけにはいかない。そこで住環境になんらかの魅力づけをしてやる必要が生じてきたのです。それがだいたいの昭和五〇年代を過ぎた頃の話です。

美しい景観による魅力づけ

しかし魅力といっても、ひとつというわけではありません。まず見た目の問題。つまり美しい住環境をつくる

ことです。たとえば緑があったり川の流れがあったりということも無論ありますし、建物自体に変化をつけてやることも重要なことです。これまでは、みんな同じ形の箱型住宅が並行に並んでいるだけだったけれど、それでは美しくないということと、バルコニーに凹凸をつけて特徴をつけたり、いろんな色を使ったりして、個性的なつくりになりました。

また、このようにしてできた景観をみんなが守り、育てることも必要です。住む人が協定をつくって、住む人が変わっても景観が守られるようなしかけがあることも住宅地の魅力になります。これも個性ということに関連しますが、建物にローカリティを持たせることも大切なことです。最近、九州の島原でつくった公営団地はそのよい例です。島原は武家屋敷がそのままでの姿で残されているところと、その門はとも美し。そこで団地の門を武家屋敷のようにつくって周囲の景観と調和を図りました。やはり、その地域の風土や景観に合ったものをつくることも、もう少し考える必要があると思うのです。

生活形態の変化に即したアメニティ

さて、これまでお話してきたことは、どれもハード面のことでしたが、いまはむしろソフト面のサービスを考える時代になってきたようです。それは日本人の生活形態が変わってきたためだといえます。昔はこの家庭も、昼間、誰もいなくて留守になることはあまりありませんでしたが、現在は共働きの家庭が増えて、日中家を留守にする家庭が多くなりました。そうしたときに、宅配便が届いても受け取れない。それでは困りますから、団地内で預かってくれるところを設ける。小さいことに思えるかもしれませんが、意外と重要なことです。それと昼間人がいないということは、防犯を考えると非常に不安なものです。それを解消するために、セキユリテイの面でも力を入れるようにしました。

また日本人の生活が夜型に移行してきたことは、団地とそれに付随する施設について再考する余地を与えました。アメリカやヨーロッパなどを見るとわかりますが、彼らは仕事を終えてから芝居を見て、その後でレストランで食事をするのが、ごく普通にできるのです。これ

はつまり夜型の生活をサポートする商業施設なり文化施設が用意されているからです。しかし日本ではできない。もし芝居を見に行こうと思ったら、終業と同時に飛んていかなければ間に合わないし、その後で食事をしようと思っても飲み屋しかやっていない。最近やっと二四時間営業する店ができてきたけれど、まだまだ不完全です。商業施設にもまして不備なのが公共サービスです。日本

本は交通機関が終了するのが、欧米と比べて非常に早い。たとえば夜中の一時すぎには、郊外の駅前にはタクシーを待つ人の行列ができる。ヨーロッパでは、かなり前から深夜バスを走らせていました。つい最近になって日本でも始めたようですが、その数は多くはありません。文化施設でもそうです。私はスウェーデンにいたことがあるのですが、スウェーデンの団地内には図書館があ

って、そこは夜しか開館していません。なぜなら学生は学校の図書館を使えばいい。けれど、仕事をしている人は夜しか利用できませんから、そうした人たちのために団地では夜でも図書館を開いているわけです。こうしたことは、日本でも近い将来いわれだすでしょう。

サービスがアメニティを高める

ここで「人が快適に住まうこと」の意味について、もう一度考えてみましょう。確かに表面的な美しさもアメニティの大切な要素ではあります。しかし果たしてそれだけでいいのでしょうか。快適に住まうことの根本には、むしろ利便性であったり、セキユリテイということがあるのではないのでしょうか。ならばアメニティとは生活をサポートするサービス施設を整えるという意味も大きいのではないかと、私は思うのです。

(とみやす・ひでお ㈱市浦都市開発建築)

コンサルタンツ代表取締役社長)

(談)



右：各棟間のコミュニケーションがはかりやすいように、地上レベルの道路の他に、3階にも渡り廊下を設けた団地（埼玉県宮の入間・向陽台団地）
下：武家屋敷の多かった街に建てられた団地。門がまえとかアパートの屋根などに武家屋敷のイメージをしつらえて、歴史的なつながりをもたせている（島原の市営団地）



賑わいの場にみるアメニティ

望月照彦

快適性とは何か

アメニティ＝快適性というのが、現在の一般的な受けとめ方ですが、では快適であるとはどういうことなのか、いまいち気にかかっています。

たとえば商業空間の例でいくと、コミュニティマート構想というのがあります。地方の商店街が新興の大型商業施設の出現で危機に追いやられる、つまり商店街クライシスという現象が起こっていて、コミュニティマート構想はそれをなんとか再開発しようというものです。この構想で重要項目としてあげられているのが、商店街の「アメニティ性を高める」ことです。従来のように、単純に物を買うための空間から一歩進んで楽しさとか快適性をプラスした空間をつくらうと、それでアーケードをはずして青空が見えるようにしたり、樹木を植えたり、ベンチを置いてみたりと、いろんな試みをしたわけです。

ところが、これによって商店街が再生したかというところ、必ずしもそうではない。なぜダメなのか。要するにアメニティの意味をはき違えているからです。環境をグレイドアップしていくことは大事なことです。商業空間のような賑わいの場に必要なのはそういったハード面だけではないと思うのです。

悪場所的環境も都市の大切なアメニティ

昔、新宿東口の中央通りというのは、とても栄えていたところだった。いわゆるヒッピーやフーテン、そういうデラシネ（根なし草）たちが集って独特の雰囲気の間をつくらせていたんです。けれども道路を整備し樹木を植えて街をきれいにしたとたんに、さびれてしまった。かつての中央通りは、環境的にはいたした環境じゃなかったけれど、人々が集って情報交換をし合い、何かに触発されて新しい思想や芸術運動をつくりだしていくよう

な、そんなエネルギーに満ちた空間だった。そこには、ある種、危険ではあるけれども、人を魅了してやまない都市の混沌（カオス）があったわけです。しかし、それが開発という名の下に、こぎれいに整備されてしまったために、中央通りは衰退していったのです。

この例は、盛り場とアメニティを考えるうえで、とても重要なことを示唆しているんじゃないでしょうか。お役人や計画家は物の上っ面だけを問題にする傾向があるから、アメニティというときにすぐに美観とか安全性の方向で開発を進めてしまうけれど、人間が都市に求めるものは、たとえ上辺は汚くとも、そこに行くワクワクするような、多少怖さをもった場所じゃないかと思うのです。まず人がいなければ都市は機能していきません。とすれば当然そこに人をひきつける装置が必要なのです。私が考えるアメニティとは、むしろそういうことです。ですからアメニティを単なる快適性と解釈するのは少し違って、いるなという気がするんです。私が最初にいったアメニティのはき違えとはそういう意味です。街のすみからすみまできれいに磨きあげて全てをあらわにして見せることがアメニティではない。そこ、ここにやましい

部分（いわゆる悪場所的環境）があって、それをあえて隠しているような空間こそ、人間が最も本質的に望んでいるものなのです。これは都市の中のアメニティの大切な条件でしょう。

民俗性をベースにしたアメニティ

そしてもうひとつ。コミュニティマート構想のようなものが、なぜうまくいかないのか。近頃の地方都市を見ると、いずれもミニ東京になってきています。東京と同じブランドのお店があつて、同じような空間構成をしている。でも本来、その地方には土着の風俗や風習があつて、それによって都市の持つ顔もそれぞれ違っていたはずなのです。都市化という得体の知れないものによるめこまれて、東京を模倣していった結果、その地方の民俗性が失われ、同時に魅力も失われたわけです。要するに自分たちの街の生活——民俗性みたいなものを踏まえたうえで街づくりをしないと居心地のいい街にはならないのです。

「東京のように」という発想で地方都市まで演出してしまうことは、非常に思い上がった考えだし、またそれでやってしまうと失敗してしまうこともある。そう考えていくと、民俗性というのにもアメニティの要素のひとつに含まれているのではないのでしょうか。

つまり表面的なアメニティ論よりも、大切なのは都市の賑わいをつくる装置として、アメニティをどうとらえるかということが、今後私たちが考えていかねばならないことなのです。

（もちづき・てるひこ）

都市計画家、商業空間プロデューサー



エスニックそのものの盛り場（明洞）／撮影 普後均

都市のアメニティを採る

徳田 一九世紀のイギリスで提唱されたアメニティの概念は、日本には第二次大戦後の高度成長期の反公害、環境保護のための思想として導入され、その後街づくりの要素として定着しつつあります。

この特集で、私たちは様々な方向からアメニティとは何かを探ってきましたが、最後に藤森照信、枝川公一、松葉一清の各先生方にユニークな視点から、現在の都市に見られるアメニティを探っていただきたいと思います。

アメニティとは……

徳田 アメニティの概念は人によって多少捉え方が異なっているようですが、まず最初に先生方のアメニティ観をご披露いただきたいと思います。藤森先生、いかがでしょう。

藤森 アメニティといっても、イギリスなどではいわれているのと、日本でいわれているのでは、意味がだいぶ違っているでしょうね。もう半世紀も前からアメニティが都市づくりの中に入っていたイギリスとは違って、日

本の場合はこの一〇数年くらい前から、それまでの都市計画に欠けていたものとして出てきたんです。

日本の都市計画が今までやってきたことは、だいたい実用的なことが多くて、道路を拡げるとか、上下水道を完備するとか……。だから都市の基盤設備はしっかりしているんだけど、それにもう少しプラスアルファした部分、ゆとりみたいなものがアメニティだと解釈していますね。枝川 僕は藤森先生のように、しっかりした見解があるわけじゃないです。だいたいアメニティが何であるか、わかっていない方の一人だと思ふのです。だからアメニティとはこういうものだと定義することなど、できない。ただ漠然と思うのは、アメニティについていろいろと解釈を与えても、つまるところ自分の気分のレベルで、良い悪いの判断をするしかないのじゃないかという気はしますね。

松葉 そうですね。僕がいわんとしていることも、枝川先生のおっしゃった気分ということにつながるかもしれません。

つい先日、一〇日間ほどパリに行ってきました。この時

同潤会アパートにみるアメニティ

徳田 具体的な話に発展させるために、都市の中の建物、施設などに関連させたお話を頂戴したいと思うのですが、最近注目されている関東大震災後に建設された同潤会アパートなどはいかがでしょう。

飯田橋の近くにある江戸川アパートなんかは内庭あり、

水洗便所あり、エレベーターありと、当時の建築物としてはアメニティを考えた設計のように思われますが……。

藤森 同潤会は、基本的には救済政策としてスタートしたのです。つまり貧しい人たちに住宅を与えるというのが基本的な考えだった。日本が近代化していく中で、いろんな矛盾が住宅に集中していつて、その矛盾を日本にはなかった集合住宅という形式で解決しようとしたわけですね。ただ今から六〇年以上前にしては、ものすごく斬

新なことをやっていたし、60年くらい前にしては、アメニティを考えた住宅政策であったと思いますね。

徳田 枝川先生は代官山アパートを長年取材していらしたとうかがっていますが……。

枝川 僕は代官山アパートにずっと暮らしている八〇何歳のおバアちゃんと友達なんですけど、彼女はそこにもう五〇年も住んでいるわけです。最近では代官山も再開発の話がもちあがっているけれど、そのおバアちゃんは関

藤森照信
(ふじもり・てるのぶ)



東京大学生産技術研究所
助教授

枝川公一
(えだがわ・こういち)



ルポライター

松葉一清
(まつば・かずきよ)

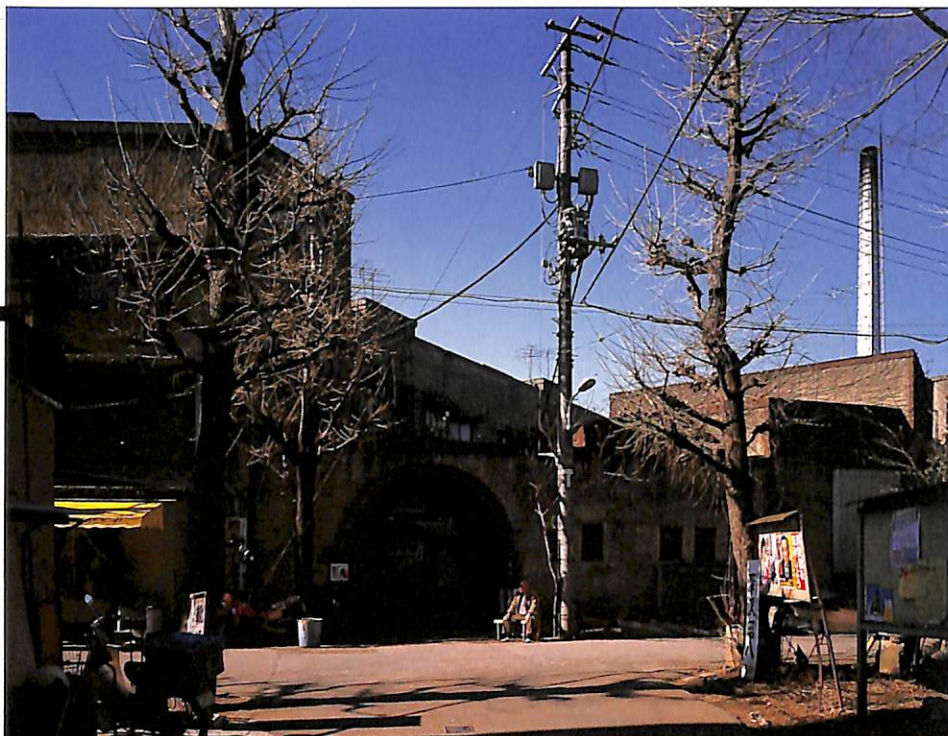


建築評論家

司会進行
徳田敦司
(とくだ・あつし)



(財)第一住宅建設協会
常務理事



〔代官山アパート〕建設当時・東京府多摩郡渋谷町代官山 837番地 着工・大正14年11月 完成・昭和2年1月 敷地面積・5967坪 規模・2階建23棟、3階建13棟 店舗、食堂、共同浴場、娯楽室つき 上の写真は今も使われている共同浴場
／撮影 伊奈英次

係ないっていうんです。「私は棺桶に入るまでいられればいい。先のことは関係ない」と……。

僕はすごく羨ましかった。僕らが今住んでいるアパートに五〇年いることができるだろうかと思えば、なかなかできないでしょう。五〇年もの間、自分の理想とする生活ができる環境、それに耐えられる環境を持っている、あの代官山アパートというのは素晴らしいと思います。

松葉 つまり代官山アパートは、人の一生分はなんとかもちたえて建っていたわけですね。今の集合住宅が、人が一生を終えるまで生き続けていられるかというと、

それは難しいことですからね。

藤森 そう。わりとすぐ醜いことになっちゃう。同潤会もメンテナンスをしなければ、まともな状態を維持するのは難しい。昔の人はコンクリートが風化するなんて考えてもみなかったものだから、あまりメンテナンスをしなかったのです。

松葉 そういえばコンクリートでつくったものは、だいたい「万年橋」とか「万年塀」とか、万年がついていますね。徳田 つまり万年はもつといわれていたわけですね。建物だと半永久にもつ建築といふ最近までいわれていまし

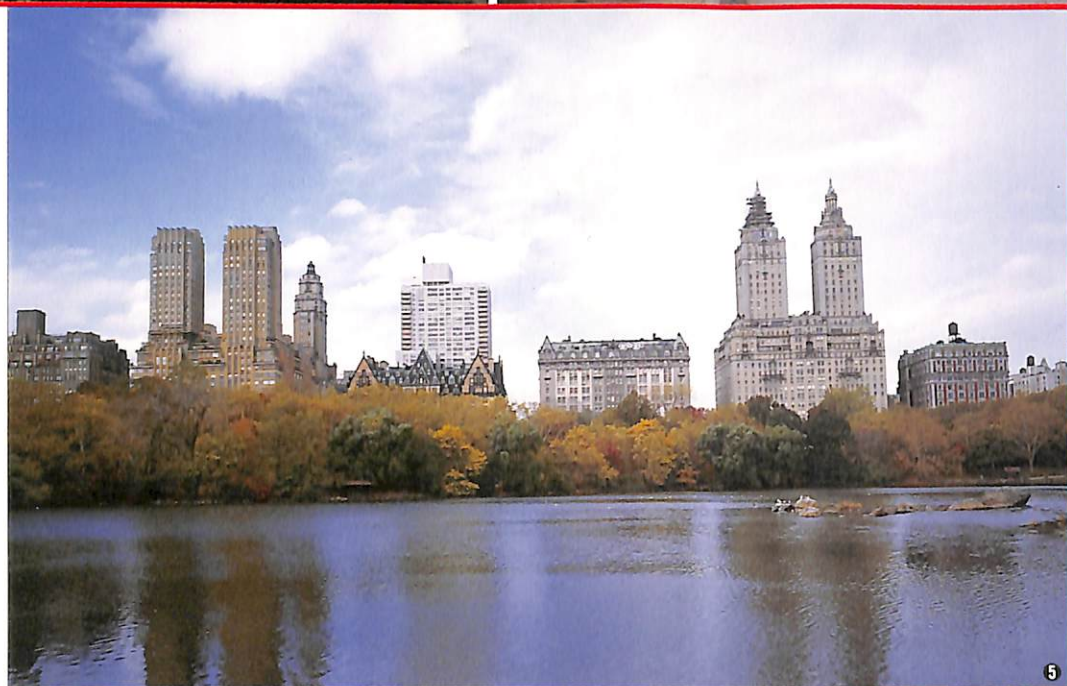
たしね。

藤森 そうですね。

松葉 同潤会はいいい面もある面もあると思うのです。たぶん地方から都市に流入してきた人を集めてどうやってコミュニティをつくっていくかということが、同潤会にはあったんじゃないでしょうか。共同浴場や共同の食堂をつくったのは、それによってあの空間をひとつの村にしようという発想だったような気がするのです。すべての都市生活をひとつの空間の中で完結させようと考えた人の、一種馬鹿げたエネルギーというのは、やはり凄か



①②凱旋門・エッフェル塔はともにパリのアイデンティティであり、世界の人々にとってもメモリアルなアメニティ空間である／①世界文化フォト、②撮影 阿部英知
③上海の庶民住宅の風景④公道をわがもの顔に陣取り、音楽を楽しむ上海の人たち／撮影 杉田敦
⑤ビルだらけのマンハッタンの中で、唯一緑を借景にしようとするセントラルパーク⑥公園でつろぐ老人(セントラルパーク)／撮影 伊奈英次



①丘陵地をひな段式に造成し、幾何学的な景観を演出したサンフランシスコの住宅地
／世界文化フォト②夢・アメニティを乗せて走るケーブルカー(サンフランシスコ)
撮影 徳田敦司



ったと思います。ただ日本のアパート生活が資産形成にどう影響したかという問題はありますね。
藤森 パリでは驚いたことに、建物の原価償却がないのだそうです。周囲がいい場所になると建物の価値もどんどん上っていく。もちろん税金も高くなっていく。ところが日本の場合、麹町であろうが、霞が関であろうが、家屋の税は毎年下がっていく。日本では建物は五〇年くらい経つと消滅するという前提にたっているから、そういうことになっちゃうわけです。松葉先生がおっしゃったように、日本では土地のついていないものは資産形成にならない恐れがある。これがパリだと、土地と建物は同じ意味なんです。だから建物のメンテナンスをとってもマメにやっていて、古い歴史のある建物がしっかりと残るわけです。

枝川 そういえば外国に行くと名士ほど古い家に住んでいますもんね。

松葉 値段も高いしね。

独裁者がつくった都市のアメニティ

徳田 ところで、どの都市にも歴史的でメモリアルな建物というのがありますが、あれはその都市のアメニティに関わりがあるのでしょうか。たとえばパリの凱旋門とか……。

松葉 フランスのような中央集権国家と、日本とは話が全く違ってくるだろうけど、凱旋門やエッフェル塔は、実利的機能だけで見ると何の役にもたっていないですね。しかし、それらはアメニティと直接関わるかどうかかわからないが、その都市を都市たらしめるシンボルにはなっています。無駄と思えるような莫大なエネルギーをかけて、その時の為政者が自分の権力誇示のためにつくったものだけれど、年月を経るとわりあいその都市の核

使うのも下手でしょう。

藤森 広場というものはおそらく行き場がないから行くんでしょね。パリの街並みというのはピシリと建物がつまっていたり、それが広場に出るとパースと視界が開ける。それを求めて行くのじゃないですか。日本は広場自体にあまりリアリティがなくて、街自体がスカスカしているだけです。行こうという気にならないのです。松葉 それと日照の問題が絶対大きいですね。ヨーロッパ諸国は日があたらないから、広場みたいなところに行って日光浴をしないと生きていけない。そういうと大袈裟ですが、日照に関して恵まれている地域とそうでない地域とでは陽光についての感覚が違うと思うんです。日照で特に困った思いをしない日本人は、あえて広場に行こうとは思いません。

枝川 郊外の公園は別ですけど、都心部の公園というのは周りに住宅がないでしょう。あれも広場が使われない原因だと思えます。セントラル・パークの周りは全部アパートでその住人たちが公園を見ながら生活している。だからセントラル・パークは彼らの庭的なものになっているわけです。

藤森 日本は日比谷公園にしてもオフィスビルばかりだからね。

枝川 そう。だから公園の周囲を住宅にしちゃえばいいと思うんです。

徳田 なるほど。面白そうですね。そういえば枝川先生はサンフランシスコの本を出されていますね。あの本を拝見したのですが、サンフランシスコというのなかなか面白い都市のようですね。

枝川 観光地と普通の都市が混在していて、でもそこにいる住人は格別観光地であることをイヤがってはいない。しかもおおかたのアメリカ人というのは、歳をとったらサンフランシスコで暮らしたいと思っている。アメリカ

というか、都市の位置づけをする大事なファクターになっている。

枝川 パリという街は、不条理なエネルギーをかけてつくった馬鹿げたものが、本当にたくさんありますね。でもあれがなければ、パリにきたという感じがしないし。松葉 たぶん、その時期の絶対の権力者が、偏執的にエネルギーを投下していかないと、本当の意味での環境の付加価値みたいなものはでてこないと思うんです。

藤森 日本の例でいくと、国立の大通り。国立という街はあの大通りと、一橋大学がなくなったら、世田谷の住宅地と全く変わらない。結局あれだけの緑とオープンスペースがあるということが、売り物になっています。国立は、小オスマンとも言えるべき堤康二郎が「こういうものがつくりたい」と、採算度外視でワンマンでつくっちゃった。しかしそれが後半世紀以上の国立のステイタスを決めている。あれがあるから国立のイメージは上がっているわけです。

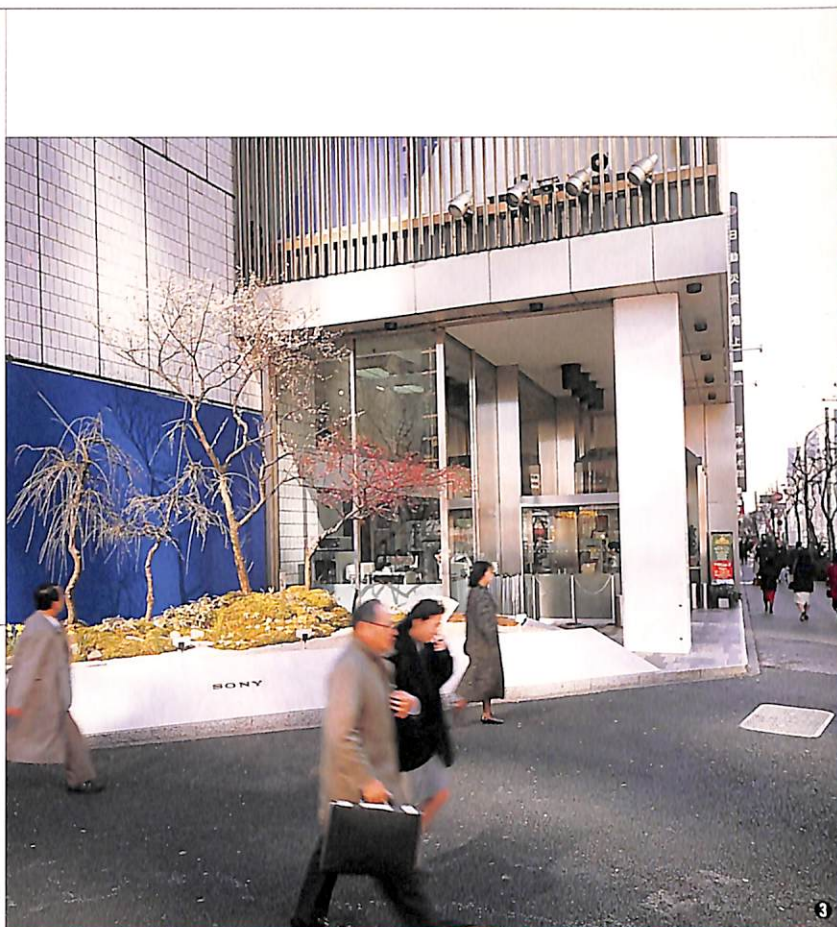
松葉 そうやってみると、独裁者というのも大切かもしれないですね。住んでいる側の市民意識からすると、どうかかわりませんが。

街は使われてこそ魅力的になる

徳田 話は変わりますけれど、生活という角度からアメニティをみてみたいと思います。枝川先生、どこか印象に残っている都市がごありますか。

枝川 中国の都市の街並みに、僕はアメニティを感じますね。

中国の街はどこでもそうですが、公と私の境界がものす



企業つくる街角アメニティ空間①和光ショーウィンドウ②東京ガスポケットパーク③ソニービル④INAXショールーム／撮影 伊奈英次

人の幻想に支えられた街なのです。実際には市長が殺されたりする悲惨な事件が起こるような場所なんだけれど、景観はきれいだし、気候はいいし、幻想を抱かせるだけの装置が、サンフランシスコにはありますね。

藤森 なんだか海外の話ばかりになっちゃった。

銀座のショールームをアメニティ空間に

徳田 それでは最後になりますが、東京、たとえば銀座通りなどのアメニティ空間についてお話をうかがえ

ますか。

松葉 銀座なら、やはり企業のショールームでしょう。ただ現時点ではほとんど活用されてませんけれど。あそこは最高のアメニティ空間になる可能性を持っています。今までの空間は、単に物を見せたりする一種のサービスセンターでしかなかったわけです。それをたとえば一部本屋にして、お茶も飲めるようにするか、銀座という街に対して何らかの機能を果たすように変えていけばいいと思うのです。

藤森 不採算を前提にやっているんだから、それは十分可能ですよ。

枝川 もし将来をそうなれば、銀座にはたくさんアメニティ空間ができる。

徳田 アメニティのある街をつくるためには、ゆとりのある投資、都市に住む人みんなが誇りにできる、あるいは幻想をもたせるような仕組みづくりが大事であり、また住民もこれを上手に使い、お互いが相乗しあって初めて都市のアメニティが成立するわけですね。今日はいろいろと楽しいお話をいただき、ありがとうございました。

長崎で提案したあるいは提案したい私の構想

武 基雄

終戦後は戦災復興院という建設省の前身に当たる役所がありまして、都市計画の研究者が多く引っ張り出され、全国の主要戦災都市に派遣、その復興計画をさせられたものです。小生は広島と長崎を受け持たされましたが、広島地方は丹下さん、浅田さん、大谷さんが一緒に、広島と呉などを手掛けたので、これは三人の方たちに報告してもらった方がよいでしょう。

長崎は小生の故郷でもありますし、早大の大林さんが一緒にいたから、長崎の方を思い出して話すことにいたします。

言う迄もなく、長崎は原爆の町ですから、復興には一生懸命でしたが、現実的には実現困難な事態が多かったようです。しかし小生等は計画のためやって来たのですから、つい不可能に近い構想を提案してしまいました。

その一つは、大村湾口の渡橋で、いまは西海橋という大きな橋が架かっていますが、当時はまだ無理だったようで、小生の提案に全く反応がありませんでした。後年橋が架かってからは、大村湾を挟んで陸の孤島といわれた西彼杵半島も、漸く行き易くなり、例のオランダ村などが生まれたのです。その点小生の構想は先見の明があったかもしれませんが、そうではなく、時宜を得ていなかったということです。

その二つは、浦上川の河口、これも架橋であります、長崎駅の後方から、三菱造船所のある対岸まで橋を渡せば、河の上方を廻るのに比べて、はるかに早道になるという計画でした。しかし査察に来られた復興院の専門官

に「橋を架けると必ず後で悔やまれる。隅田川の場合など好例で、橋ができた、隅田川の岸の港としての性格が、失われたではないか」と否定されました。そのため構想は潰れてしまいましたが、いまは再び再開発計画によって橋梁ができたようです。

以上は思い出話であります、ついでに現在の長崎についても、構想じみたことを提案したいと思います。

それはカナダのバンクーバーの港で、仲間と小さな遊覧船に乗って、飲み食いしながら、楽しく湾岸を一周したのですが、それをぜひ長崎港でも試みられないでしょうか。

たまたま長崎港外の伊王島や高島の炭鉱が閉山になりましたが、その中で伊王島は最近養殖魚の海洋牧場として売り出していますが、高島の方はそのような活性化ができないで、行末が案じられています。それらを結びつけて、次のような構想はいかがでしょうか。

すなわち先程の長崎駅後方の棧橋から、遊覧船を出航させ、三菱造船所のドックなどを見物して、港外に航行し、伊王島を経て、終点の高島に着きます。高島には炭鉱の博物館やシーフードレストランなどがあってよく、できればディズニーランドのようなイベントがあれば、長崎の市民にも喜ばれると思います。帰途は大浦寄りの沿岸を通りますが、往復約三時間前後、興味津々たるものがあります。こうした計画は、高島を救済するばかりでなく、長崎の新しい観光となるのは必定です。(談)
(たけ・もとお／早稲田大学名誉教授)



INFORMATION

○バックナンバーの紹介

『CITY & LIFE』は、おかげさまで創刊以来各方面のご好評をいただき、本号をもってNo.12まで発行してまいりました。今後ともご愛読を願い、よりよき都市生活をおくるためお役立ていただきたいものです。(内容は主要部分のみ)

No.1 特集「都市の幹線道路」(1984.2)

〈座談会〉昔の道、今の道／井上孝・日笠端・高見澤たか子

No.2 特集「都市公園」(1984.5)

〈座談会〉いま、公園抜きに都市は語れない
／佐藤昌・日笠端・高見澤たか子

No.3 特集「都市と河川」(1984.12)

〈座談会〉川とともに生まれた都市、都市とともに育つ川
／高橋裕・日笠端・高見澤たか子

No.4 特集「子どものための都市計画」(1985.6)

〈座談会〉都市計画と子ども空間／日笠端・小川信子・大村謙二郎

No.5 特集「都市と盛り場」(1985.12)

〈座談会〉文化的な活力を生み出す盛り場の源流を求めて
／日笠端・陳内秀信・高見澤たか子

No.6 特集「都市生活と神社仏閣」(1986.5)

〈座談会〉都市の聖なる空間／伊藤ていじ・樺山紘一・鈴木博之

No.7 特集「住宅地の道路と家並み」(1986.9)

住宅地の道路の成り立ち／日端康雄
〈座談会〉欧米と日本・住宅地の家並みと道のデザイン
／芦原義信・日笠端・陳内秀信

No.8 特集「都市とヒューマンスケール」(1987.3)

ヒューマンスケールとはなにか／戸沼幸市
〈座談会〉ヒューマンスケールと都市
／柴田徳衛・横文彦・尾島俊雄・戸沼幸市

No.9 特集「都市と水辺」(1987.7)

今水辺を問う意味とは／富山和子
〈座談会〉都市生活と水辺
／川田順造・小林治人・日笠端・高見澤たか子

No.10 特集「都市の景観」(1987.12)

よりよい都市景観をつくるために／日笠端
〈対談〉都市に求められる理想的な景観／林泰義・富田玲子
まちづくり思い出ばなし⑨(No.2より連載)／高山英華

No.11 特集「都市と防火」(1988.7)

最近の防災計画／日端康雄
〈鼎談〉人類の居住史と火事の歴史を考える
／伊藤滋・樺山紘一・徳田敦司
まちづくりについて思うこと①
(No.11より連載)／武基雄

▲第一住宅建設協会の経歴▼

昭和三〇年、第一生命保険相互会社の基金をもとに設立された財団法人であります。設立以来公益法人の理念にもとづき低廉な住宅の供給と、住宅にかかわる土地利用計画・居住環境計画・住生活改善に関する調査研究をつづけ、民間として稀有の建設大臣表彰と建設大臣感謝状をうけました。

▲本誌発行の趣旨▼

住宅戸数はすでに全世帯数を上まわり、しかも都市化がすすむなかで、私たちはより快適で充実した生活を求めています。堀で囲まれた屋敷の中に豊かさを求めるだけでなく、歴史的な資本の投下された市民のためのいろいろな都市の施設、自分の生活の中に位置づけ上手に利用する方法を知ってほしいと思います。そのために、都市のいろいろな「しくみ」と使い方を西洋・日本の都市を事例にとりあげ、どなたにもあきることなくご理解いただけるよう、年二・三回の予定で編集発行していきたいと思っています。

▲編集後記▼

○最近、「アメニティ」という片仮名がとび交っている。しかし、その概念は今ひとつよくわからない。
○そこで、街づくりに携る各分野の専門家の方々が、アメニティをどのように解釈し、具現しているかを探り、全体像を組立ててみようとしてみた。当初まとまりのないものになる懸念があったが、取材を終えてみると、さすが一流の専門家の解釈にはそれぞれ説得力があり、現在の日本の都市計画におけるアメニティの意味・位置づけが解明できたと思う。
○都市生活について、共通に言えることだが、作る側と使う側、相手からの働きかけによる相乗効果がアメニティの質を更に高めるようだ。特に使う側、住民のエンジョイ・マインドの向上を期待してやまない。
○本誌はアメニティだけを全頁特集としてとりあげた本邦初の努力作である。

(常務理事・徳田敦司)

City&Life No.12

●企画委員

日笠端(東京大学名誉教授)・日端康雄(筑波大学社会学系助教授)・高橋公子(日本女子大学住居学科教授)・徳田敦司(当協会常務理事)

●1989年2月発行

■編集・発行・財団法人第一住宅建設協会

東京都千代田区有楽町1丁目13番1号 第一生命ビル内
03-212-0787

編集・デザイン協力

株式会社アルシーヴ社・ライス・スタジオ

印刷・株式会社恒陽社印刷所

頒価・300円+送料200円

第一生命グループ

財団法人 第一住宅建設協会

